

考古資料編

はじめに

本編は、主として豊岡市の原始・古代にかかわる考古学的資料を提示し、その理解を助けようと設定されたものである。

第1章では、豊岡市域を各小学校ブロックに大きく分割して、主要遺跡の分布状況を地図で示しながら説明する。

第2章では、縄文時代に属する遺跡と遺物について説明を加えていく。第3章では、同様に弥生時代の遺跡と遺物を、第4章では古墳時代について説明する。弥生・古墳の両時期については、市域の調査が丘陵部で重点的に進められてきたため、墓遺構の調査の説明に偏らざるを得ない点をまずお断りしておきたい。さらに第5章では、扱う数は多くないが奈良・平安時代以降の遺跡や遺物について説明する。

豊岡市内の遺跡と遺物を網羅することは、調査が急速に進展し膨大な資料が蓄積しているにもかかわらず、かならずしも容易なことではない。その要因は、発掘作業に追われ、整理作業が著しく遅延しているからである。

したがって本編の記述に際しては、次のことを原則として進めることとした。

- 1、なんらかの調査が実施された遺跡と遺物については、原則としてすべて取り上げる。
- 2、遺跡を主体的に記述し、遺物は従属的に扱う。
- 3、記述は、調査の契機、遺跡の立地、検出された遺構、出土遺物、まとめについておこなうこととする。
- 4、学術的に重要なものには多くの紙数を割き、そうでないものはやや簡単な扱いとする。
- 5、本文でふれにくい遺跡や遺物については、第1章で略述した。

なお、本編の執筆については全体を瀬戸谷皓が構想し、大澤由美・松井敬代・宮村良雄の援助を得ながら瀬戸谷と潮崎誠がおこなった。すでに報告書や実績報告の出されているもの、あるいは準備中のものは、抜粋や一部補訂をしながら執筆したものも多い。

第1章 市内遺跡の概要

1.1 あらまし

本市には、古墳をはじめとする多数の遺跡や遺物（埋蔵文化財）が存在する。特に、最近の分布調査の成果によると、文化財保護法の規制を受ける対象遺跡は、平成元年でおよそ3500件となっており、その数は踏査が進めばまだまだ増加する傾向にある。

本章ではこれらの遺跡の分布状況について、市域をおおむね各小学校区に分割して簡単に説明を加えていく。それは、港東・港西・田鶴野・五荘・奈佐・八条・新田・三江・神美・中筋・豊岡（市街地）の各地域である。

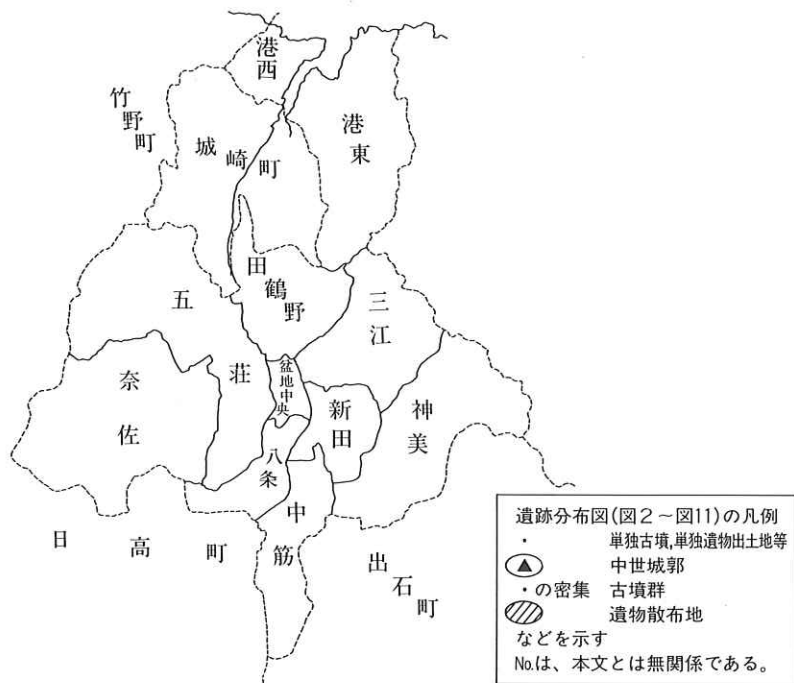


図1 豊岡市分割図

1.2 港東地域 (図2)

この地域では、早く大正元年の銅鐸出土が著名であるが、実はその後の新規発見がほとんどなく、また、きわだった古墳等の遺跡の存在もさほど知られていない。時代を追っていくつか代表的な遺跡にふれておきたい。

弥生時代では気比銅鐸出土地が有名であるが、遺跡の実態についてはやや不分明である。岩穴内に貝殻が敷かれ、そこに4個が置かれていたとするものであるが、その行為が弥生時代のことであると断定して良いかどうか判断に迷うところである。

銅鐸出土地近くの気比神社境内周辺の宮代遺跡から、土器片や石錘の出土が伝えられている。同じく気比の観正寺付近の畑地で土器片が採集されているが、いずれも厳密な時期の特定はできない。現状では未確認だが、近い将来に土器製塩に関する遺跡が豊岡市内で発見されるとしたら、この地域はまさにその最有力候補地ということになる。

絹巻神社裏山古墳群の所在地は、一帯が絹巻神社の境内であり、また県指定の天然記念物の暖地性の原生林である。そうしたこともあって、山頂部には現状で6基ないし7基の残存状態の良好な小規模古墳が認められる。樹木が繁茂しているために詳細にわたっては不明であるが、いずれも径7～8mの小規模古墳である。

立地や規模、市域の他の例から考慮すると5世紀ないし6世紀前半頃までの古墳群であろうとみられる。墳丘が全般的に低平なこともあって石棺もしくは木棺を直接埋納した古墳であろうと思われる。

後期の古墳群として、田結地区の風谷古墳群と小井戸浜古墳の一連の横穴式石室の古墳群がある。合わせて3基以上の後期古墳群で、特に風谷古墳と呼ばれる例は、市域の横穴式石室としては最大規模を測る。後に実測結果などについて述べる予定である。

所在した位置など実態は不明であるが、須恵器大甕に人骨が入っていたと伝承されるのが気比字北野の塚である。口縁部を欠くものの、ほぼ完形の壺の腹部に小さな孔がみられ、そうした伝承を裏づけている。須恵器は、豊岡市立郷土資料館に保管されている。

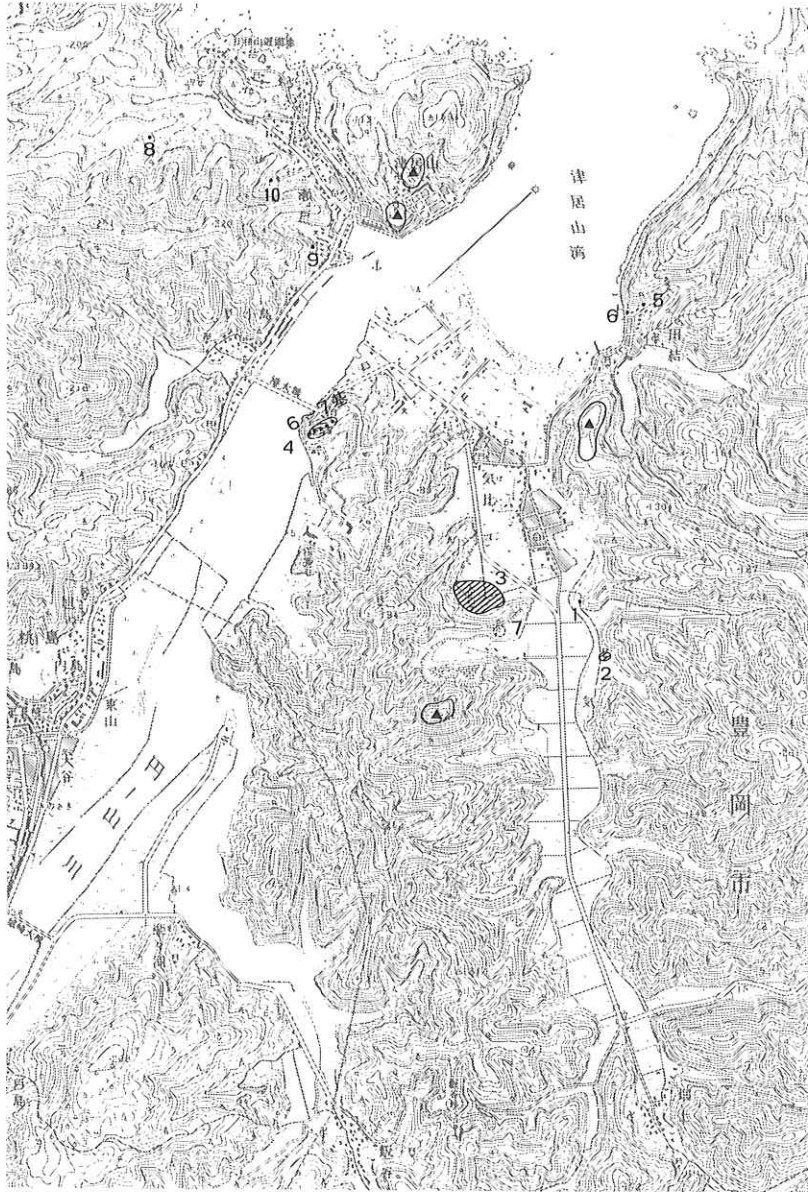


図2 港地域の遺跡分布

時期的に新しくなると、気比字太平寺や同じく字岩谷から経塚らしい痕跡が見つかっている。いずれも工事等の不時発見に伴うものではっきりとしないが、太平寺経塚については遺物が残されており重要なものである。遺物について研究がなされているので、後に詳しく紹介しておこう。

1.3 港西地域 (図2)

本地域は、円山川最下流域の左岸域を中心とする。縄文・弥生時代の古い資料は、瀬戸字新童住での単独出土の石斧がある程度で、その他は古墳が若干知られているのみである。石斧は、現在は但馬文教府に保管・展示されている。時期は不詳。

調査された古墳としては、港東幼稚園背後の古墳がある。急傾斜の工事中に発見され兵庫県教育委員会によって緊急調査がなされたもので、箱形石棺を内蔵していた。付近には、はっきりした墳丘はもたないものの、こうした小規模な古墳がほかにも存在するものと思われる。遺物が顕著でないため時期の特定はしにくい、前期古墳であろう。

こうした海岸部ないしは海が見える場所にある古墳には、その埋葬施設としてしばしば箱形石棺が採用されている。全国的な視野でみた場合、海にかかわりをもつ集団すなわち海人関係の墓であろうとする説が有力である。なお、瀬戸字島原には横穴式石室があった。

以上みてきたように、港地区全体としては、特に海岸部の古墳については絹巻神社裏山の古墳群が古く、その後、港西では小島や瀬戸地区に、港東では田結地区に風谷古墳群が造営されたようで、その立地からみて、いずれも漁業や海運・泊・浦・渡しなどといった舟運にかかわっていた人物や集団の墳墓と考えておきたい。

1.4 田鶴野地域 (図3)

田鶴野地域で確認されている遺物は、野上字深田のコウノトリ飼育場近くで採集された磨製石斧の小片や弥生時代中期(第IV様式)の土器片、同

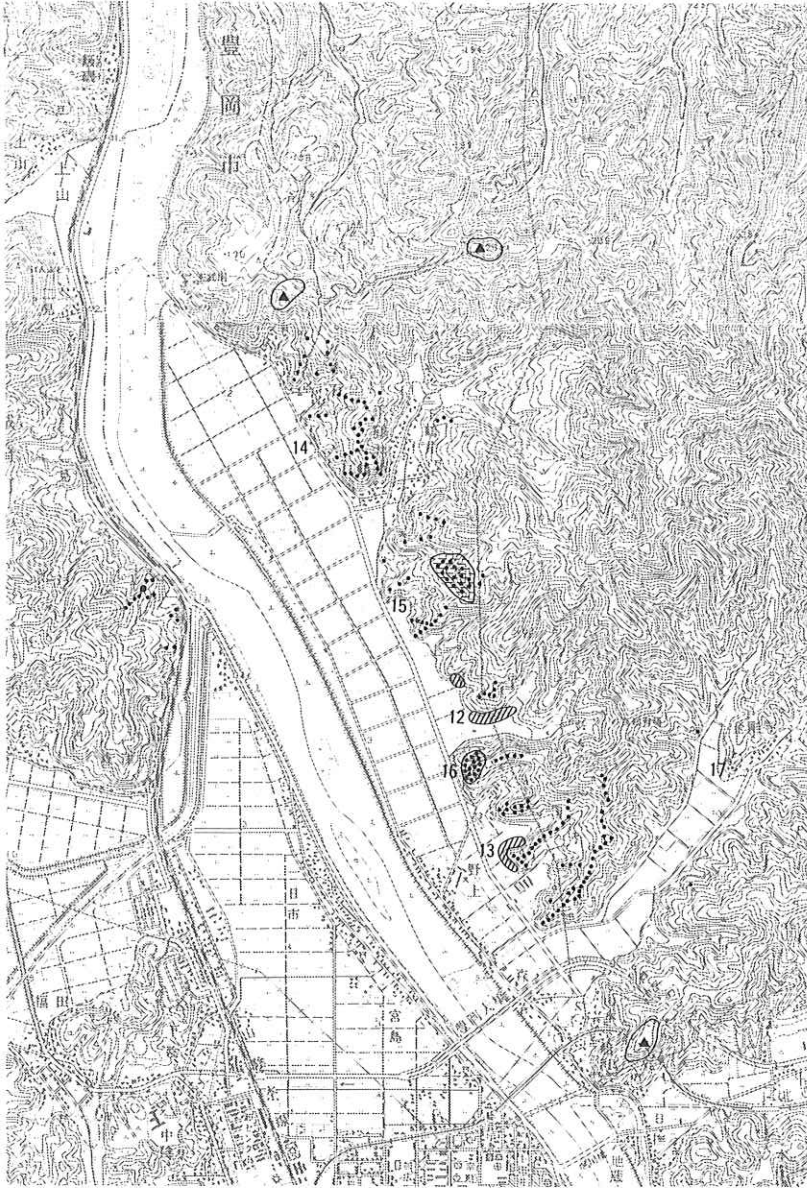


図3 田鶴野地域の遺跡分布

じ二位遺跡で表面採集された打製石鏃、さらに確認調査で出土した6世紀後半ころの須恵器が古い資料であるが、地形等から考えてさらに遡る遺物や遺跡の発見が期待される地域である。

多く知られているのは、他地域と同様に各地の丘陵地にある古墳や古墳群である。代表的なものとしては、まず赤石から下鶴井にかけての標高100m前後の丘陵上にある約50基の古墳群が指摘される。径30m程度のものや一部方形墳が見られる。また、下鶴井地区の低い尾根の先端部には横穴式石室も造営されている。

一方、野上地区の金刀比羅神社周辺の尾根上には、確認されるものでも25基以上の密集した古墳群がみられ、付近の地形が工事による改変を受けていることを考え合わせると、さらに多数の古墳があったことが想定できる。これと、次の帯雲寺を囲むように群在する古墳群との間にも8基の小群がある。いずれも内部構造は不明である。なお、金刀比羅神社の境内が工事された際に若干の遺物が出土しているようで、たまたま古い新聞記事のなかに記録がみられた。紹介しておこう。

明治44年の3月25日付の『但馬新聞』である。「土器の発掘」という見出しで、

城崎郡田鶴野村の内、野上村鎮坐金刀比羅神社境内を今回公園地に為さんとし伐木土工に従事中計らずも石廊(櫛?…筆者)を^(ママ)発掘し、中より素焼土器二個と鉄器の破片を発見せる由なるが某古好家は同地を見聞して同山絶頂にある前方後円の車塚は或は上古貴人の塚なるべしと云へりと記されている。

古墳以外の遺跡としては、早い時期の発見で実態は不詳ながら、金剛寺経塚が注目される。陶器の甕・鉄経筒・銅鏡(倭鏡)などの出土が伝えられており、うち前二者は東京国立博物館の蔵品となっている。

1.5 五荘地域(図4)

豊岡盆地の北西部に位置する地域で、森津・滝・新堂・岩熊・江野・福田・栃江・下陰・中陰・上陰・正法寺・高屋・戸牧といった地区を含む。

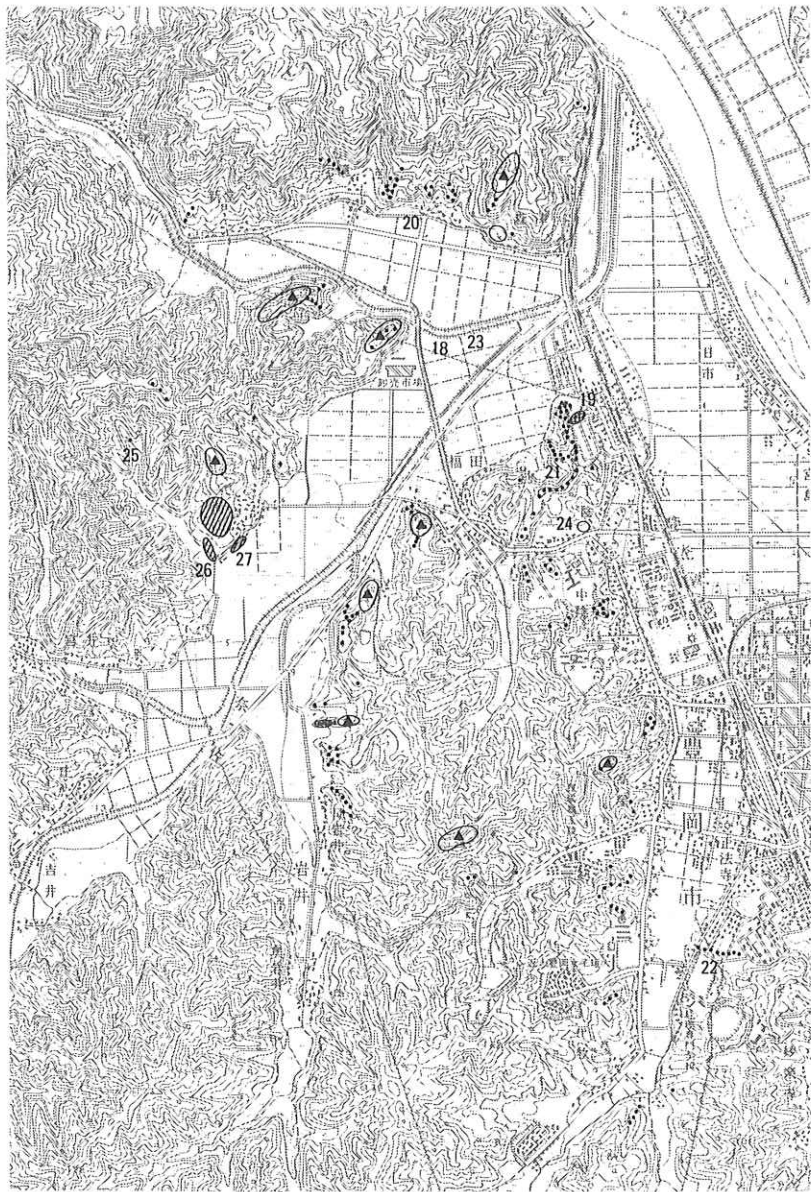


図4 五荘地域の遺跡分布

大浜川に沿う地域と、奈佐谷の谷頭部分にあたる地域、直接盆地に近接する地域に細分される。

時代の古いものでは、福田亀ヶ崎遺跡群で標高60mあまりの高地性住居が1棟ではあるが検出されたのが注目される。弥生時代中期後半のもので、但馬を代表する“高地性遺跡”と説明することができよう。

また、実態は不明ながら、福田字八崎にある森津共同墓地遺跡から弥生時代の土器の出土があった。情報や立地から考えると、墳墓群の一角が工事で破壊された可能性が強い。土器が数点採集された模様で、現在、図示したものを含めて壺形土器2点と甕形土器1点が伝えられている。土器でみるかぎり、八条地域の妙楽寺遺跡のような時期および性格の遺跡ではなかったかと考えている。

現状では、これ以降の時期の遺跡ではやはり古墳が圧倒的な数を占めている。まず、顕著な古墳群としては、森津から滝にかけての大浜川を見下ろす南向き斜面に立地するやや広がりのある30基ほどの円墳群や、下陰地区にある下陰古墳群、正法寺地区に所在した七ツ塚古墳群や福田亀ヶ崎古墳群、同じく矢谷古墳群などがある。これらは、調査結果や工事中の所見などにより、大半が石棺や木棺を直接埋納した施設のようで、5世紀から6世紀代初頭ころのものが多い。

6世紀後半以降の横穴式石室がほぼ確実なのは、先述の森津地区の古墳群のうちの数例、栃江天福古墳が目につく程度で、その他若干の例が確認されているだけで多い数ではない。

なお、城崎町域と境界をなしている森津地区には、大神塚古墳をはじめとする古墳群がある。大神塚古墳は、丘陵枝尾根の先端部に立地しており、周りのテラスを含めると基底部で長径が41m、短径35mのやや長円を呈するきわめて大型の円墳ということになる。本古墳群については、すでに『城崎町史』で詳細に述べたのでこれ以上ふれないが、円山川のほとりに立地する後期の古墳群である。

歴史時代の遺跡としては、栃江地区所在の犬ヶ崎遺跡が1987年に調査されている。また付近の甲斐中遺跡では、緑釉土器が見つかっており、希少な遺物だけに注目される。

1.6 奈佐地域 (図5)

現在までの知見で、市域で最も古い縄文時代の遺物が出土しているのは、谷の最奥部に位置する辻遺跡で、和田長治氏によって縄文時代早期の山形文をもつ縄文土器片がみついている。

その後も大平寺遺跡・内町遺跡・福成寺南遺跡・宮井遺跡というように、市内の遺跡としては縄文時代遺跡の時期的変遷と分布がたどりやすい状況がある。遺物が発見されやすいという事情だけではなしに、日高町神鍋遺跡など周辺地域の遺跡との有機的関連がうかがえる。

弥生時代の遺物を出すのは、宮井遺跡や宮井地区の神内岩遺跡・本井墳墓群、野垣地区所在の岡田遺跡などがある。

これらのほかは、遺跡として指摘できるのはほとんど古墳ばかりで、特に多いのは、宮井・庄・野垣・岩井といった地域である。

野垣地区から庄地区にかけての集落の背後の尾根上には、規模にして10m内外の小規模な円墳や方墳が群集している。野垣地区には30基あまりの小規模円墳が、また庄地区には19基の方墳と25基の円墳とが群在しており、時期的にはいずれも新しいものではないと推定される。

岩井川の左岸、奈佐川の右岸にも10基以上の群が2列、そのほかにも数基の小群が認められ、岩井川右岸の国吉神社の丘陵には6基の小規模円墳群が存在する。また左岸には、直径30m級の大型円墳があり、そこから派出する枝尾根には約40基からなる円墳群が存在する。これらの多くは内部構造が不明であるが、横穴式石室を有するものは圧倒的に少ないだろうとの見通しをもっている。

奈佐谷にはこのように、横穴式石室の群の顕著な例は知られておらず、せいぜい2～3基程度の群が単独に存在しているだけで、荒神塚古墳(大谷地区)、口岩井地区に所在した古墳、吉井地区の矢立古墳などの例があるだけである。

なお、昭和6年7月編集との記載がある「奈佐村庄部落考」という和綴じの文献には、隣接する野垣村のことを記して次のような一節がある。参考までに紹介しておこう。

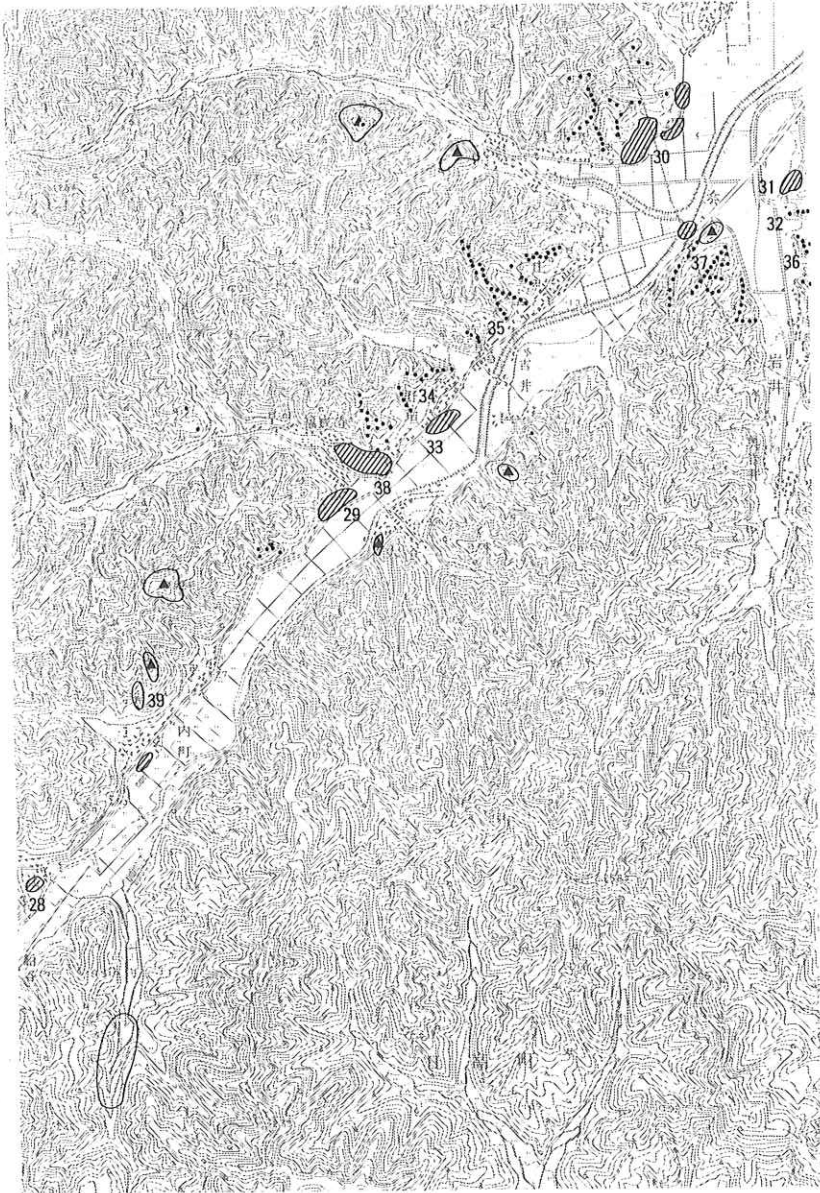


図5 奈佐地域の遺跡分布

此ノ村ハ奈佐郷中貴族ノ塋域ニシテ古代靈地ナリ 此ノ村塚本家アリ同家ノ屋敷ノウチ土蔵ノ下ヲ掘^(ママ)タルコトアリ 其ノ時葬口ヲ発見シ調査シタルニ口ヲ南ニ細ク深ク周圍ヲ板石ニテ圍ヒ死体ハ横ニシタラシク板石ヲ以ッテ蓋ヲセリ 枕元トオボシキ所ニ短刀一振り、素焼ノ土器三、四枚、金環四個、勾玉三個、奈津目玉1個、水晶玉一個出^(ツ)ズ。(以下略)

この短い文章からは多くのことを知ることはできないが、「葬口」という表現、「口を南に細く」との記述、さらには「金環四個」とされているところから、終末期の小横穴式石室古墳で、複数遺体の埋葬が想定される。また山裾の立地、金環の出土からも新しい時期の古墳と考えておきたい。

歴史時代の遺跡では、まず福成寺遺跡が特筆される。豊富でかつ質の高い遺物の出土からは、立地的には理解しにくい城崎郡衙の候補地として想定されるものである。また、これとの関連が推定される内町地区所在の須恵器および瓦の窯跡が注目される。

また、吉井地区では宮ノ下遺跡が調査されている。平安時代の須恵器などが検出されている。

1.7 三江地域 (図6)

比較的分布調査の進んだ地域である。しかし、知られている遺跡の多くはやはり古墳である。古墳以前の遺跡としては、庄境地区の24号地点の散布地や鎌田若宮墳墓群がある。続いて古墳時代になると、鎌谷川・馬路川・下宮川などの流域に多数の古墳が築かれている。以下、簡単にふれておく。

下宮地区と鎌田地区・栄町地区とを画する稜線上にはすくなくとも120基にのぼると推定される古墳群が形成されているが、このうちの数基が調査されている。鎌田古墳群と鎌田若宮古墳群である。いずれも比較的古式の例であり、後に詳しくふれよう。

栄町地区の谷の部分には、4、5基の横穴式石室が造られている。また、祥雲寺地区の集落背後の丘陵には、30～40基の小さい古墳が群在している。それより東にいくと、古墳の数は激減する。また、分布状況などは十分に判明していないものの、崖面に穿ったいわゆる横穴の存在が、日撫地区

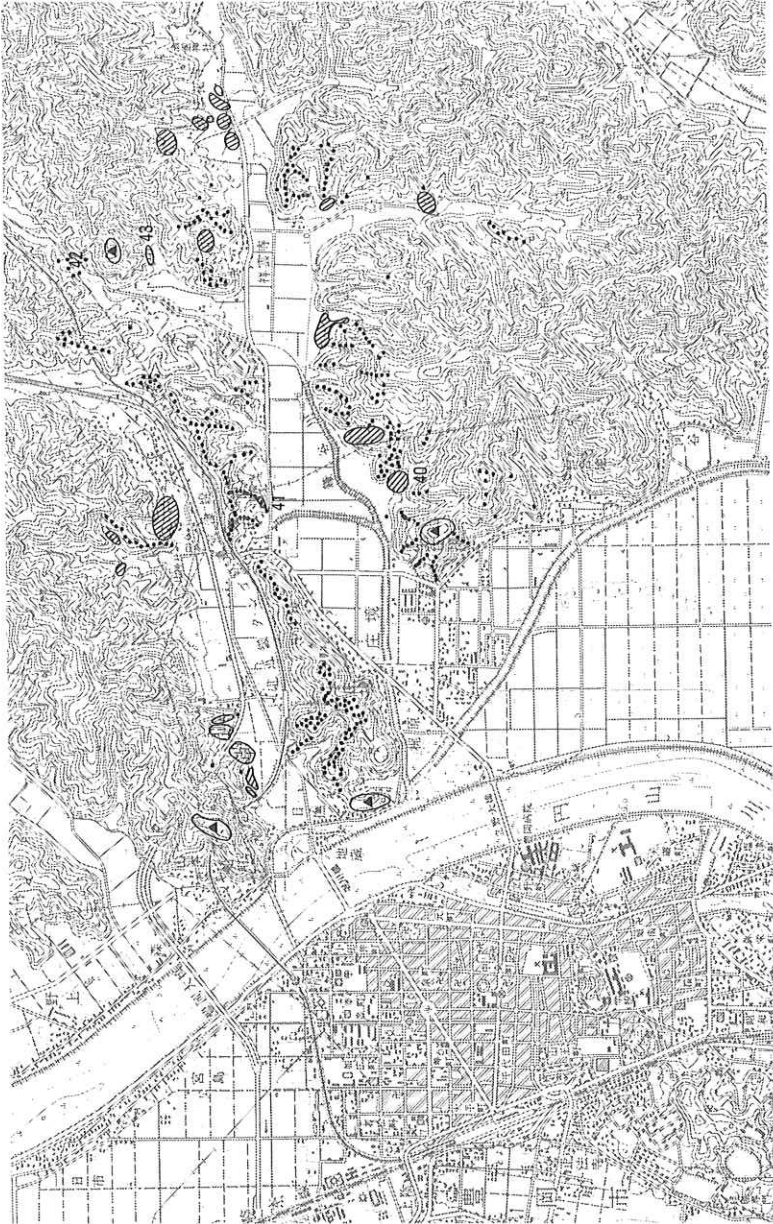


図6 三江地域の遺跡分布

や祥雲寺地区で知られている。日撫正福寺谷横穴墓群は、調査された横穴墓の例である。

一方、三江谷をはさんだ北向きの尾根斜面を中心に、きわめて密集した古墳の分布状況が認められる。しかし、内部構造についてはほとんど判明していない。現状では230基以上の古墳が存在し、これらのなかには石材などによって横穴式石室を想定させるものが一部で認められるが、ほとんどは木棺直葬の例と思われる。

歴史時代の遺跡としては、法花寺地区に認められる須恵器窯跡が注意される。複数基が場所を違えて確認されており、綿密な分布調査を実施すれば多数の須恵器窯跡が見つかる地域として期待される。时期的には、歴史時代が主体だが、一部古墳時代に遡るものも知られている。

1.8 八条地域 (図7)

盆地の南西部を縁どる地域で、主として妙楽寺地区から納屋地区にかけての南北3 kmの範囲である。このうちで妙楽寺地区所在の遺跡群は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集団墓・古墳群・寺跡・経塚・城跡等からなるもので、ほとんど重複することなく広い範囲に分布している。すなわち、地区を画する尾根稜線上には全長35 m以上の前方後円墳である見手山古墳と、付近の5基以上からなる古墳群があったが、すでに工事によって3基は消滅した。これに続いて南側には、約150 mにわたって弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形台状墓や集団墓が確認されている。後に詳しく説明する。

また、九日市上町地区の女代神社遺跡は、主として弥生時代後期の遺物を出土する遺物包蔵地で、工事によって地下深くから多量の土器がみつかったものである。また、同南遺跡はこれとは異なり古墳時代(6世紀代)の土器や奈良時代ころの遺物を出土し、柱穴などの遺構を伴う遺跡として注目したい。さらに、最近になって銅鐸破片が採集されている。

尾根稜線をさらに南に進むと、やや古墳の少ない地域を経て県立豊岡南高校付近から日高町域にかけての大古墳群に至る。



図7 八条地域の遺跡分布

本地域で発掘調査が実施されたのは、妙楽寺古墳群と西光寺谷古墳群の一部である。いずれも木棺直葬の埋葬施設をもつものであったが、横穴式石室の古墳は、上佐野地区の谷奥部に一群が認められる。総数30基あまりが西向きの山裾に分布している。

歴史時代の遺跡としては、女代神社南遺跡と呼ばれる奈良・平安期の建物遺構を伴う遺跡の存在が知られている。灰釉陶器・丹塗土器など優秀な遺物が出土している。

新しい時代の遺跡として注意したいのは、室町時代の強力な守護大名であった山名氏の居住した可能性のある九日市上町にある「御屋敷」伝承地で、今後の確認調査を要する地である。現在までの知見では、遺物や遺構は未検出である。

さらに、先に述べた上佐野地区では、ほ場整備工事に伴って元屋敷遺跡の確認調査が実施されている。

1.9 新田地域 (図8)

この地域では、中谷貝塚がとりわけ注目される遺跡で、近年その周辺で貝塚を構成する貝の採取地と想定したい場所の調査も進められた。後にやや詳しく述べる。また、昭和55年には駄坂川原遺跡がみつかっている。典型的な弥生時代前期の遺物を出土する遺跡で、小貝塚を伴っていたと考えられる遺跡である。さらに、直線距離にして200 mほどの位置に、遺跡を残した人々の墓地とみられる舟隠遺跡が発見され、調査されている。生産と墳墓がセットで確認されるのはきわめて興味深い事実である。

さて、古墳については、百合地地区から駄坂地区に至る南北2.6 kmにわたる範囲について説明を加えると、百合地地区の集落背後の尾根頂上部に大型の円墳があり、その周辺の合計40基余りの群が目につく。河谷地区には16基程度の群がある。付近の横穴式石室は、中谷地区の谷部分に若干数が認められるのみで多くない。

木内地区の三開山の山裾にはいくつかの尾根が派出している。そして、そこには新田地域に向けた部分のみで60基以上の古墳が知られており、な

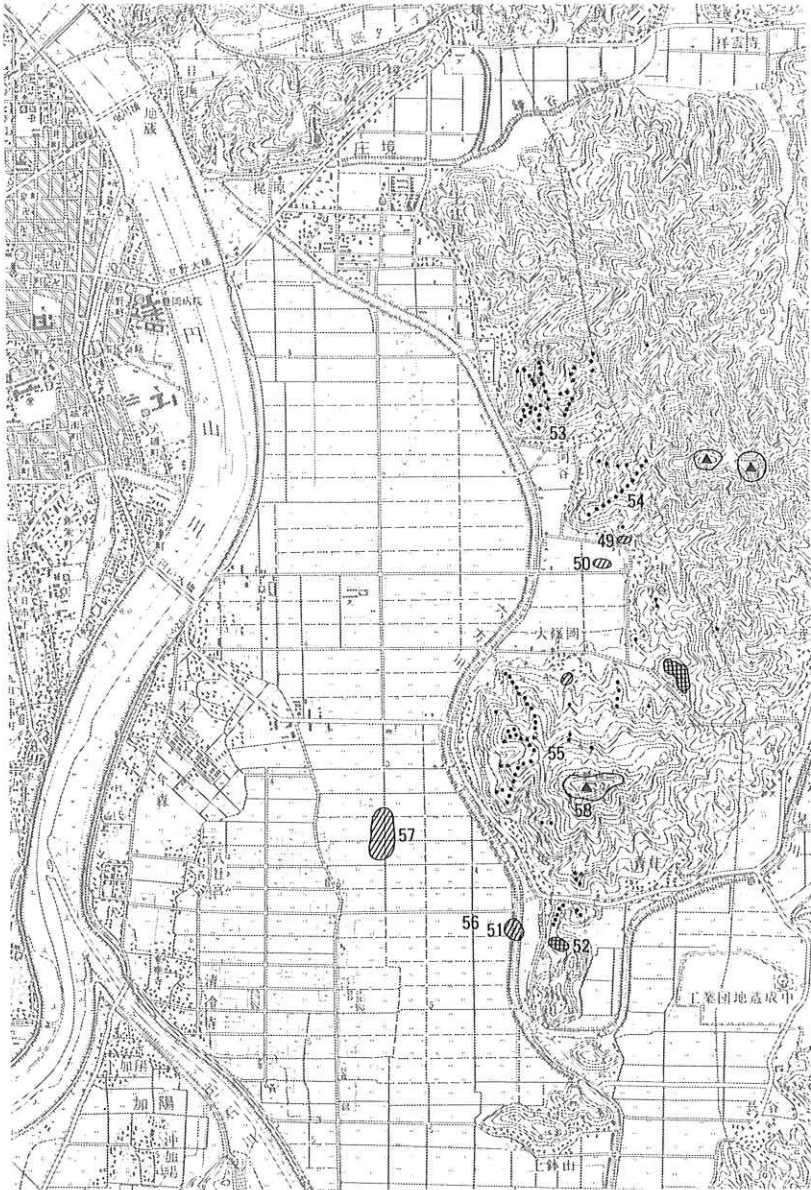


図8 新田地域の遺跡分布

かには横穴式石室も存在している。駄坂舟隠遺跡には、全長 50 m の舟隠古墳がある。これも後に詳しくみることにする。

木内・駄坂・八社宮の 3 地区境界上にある黒中遺跡は、「六方たんぼ」の真ん中に位置する低湿地の遺跡である。おそらく自然堤防上に立地する遺跡であろうが、今後の盆地中心部の調査の必要性を喚起した意味は大きい。

新しい遺跡として、ほとんど調査の手が入っていないのは三開山城址であろう。南北朝期の典型的な山城のひとつとしての評価が高かったが、最近になって畝状堅堀の存在が明らかになることで、新しい時代の要素が含まれていることが判明した。今後の積極的な調査と保護活動の推進が望まれる。

1.10 神美地域 (図 9)

縄文時代の遺物を出した遺跡としては、香住荒原遺跡・同エノ田遺跡群中の井走遺跡と長谷貝塚がある。長谷貝塚については、本書でもやや詳しくふれている。また、立石墳墓群は最近調査された墳墓群であり、比較的短期間で造られた集団墓とみることができよう。同様の事例は、やや古い上鉢山東山墳墓群がある。

立石岡田遺跡や先の井走遺跡・倉見遺跡などは弥生時代の遺物を出土する遺跡である。特に井走遺跡では弥生時代の玉生産を示唆する貴重な遺物が検出されており、今後の検討が注目される。

森尾地区には、この地域では最もよく知られた存在の森尾古墳がある。この古墳があまりにも著名なために、かえって付近の小規模古墳が長く認知されなかったのではないかと思われる。森尾古墳の近接地にも数基の古墳が造られており、やや離れて 20 基あまりの群が稜線上に認められる。

香住・三宅両地区付近の穴見川を見下ろす東向き斜面には、多い数ではないがほとんど例外なく 3～5 基程度の小群が立地している。これらのなかには墳丘高の高いものもあり、横穴式石室を内蔵するものがあるかもしれない。また、穴見川左岸の集落がとぎれるあたりの山裾には、10 基以上からなる横穴式石室の群があるが、そのほとんどは乱掘されて形をとどめ

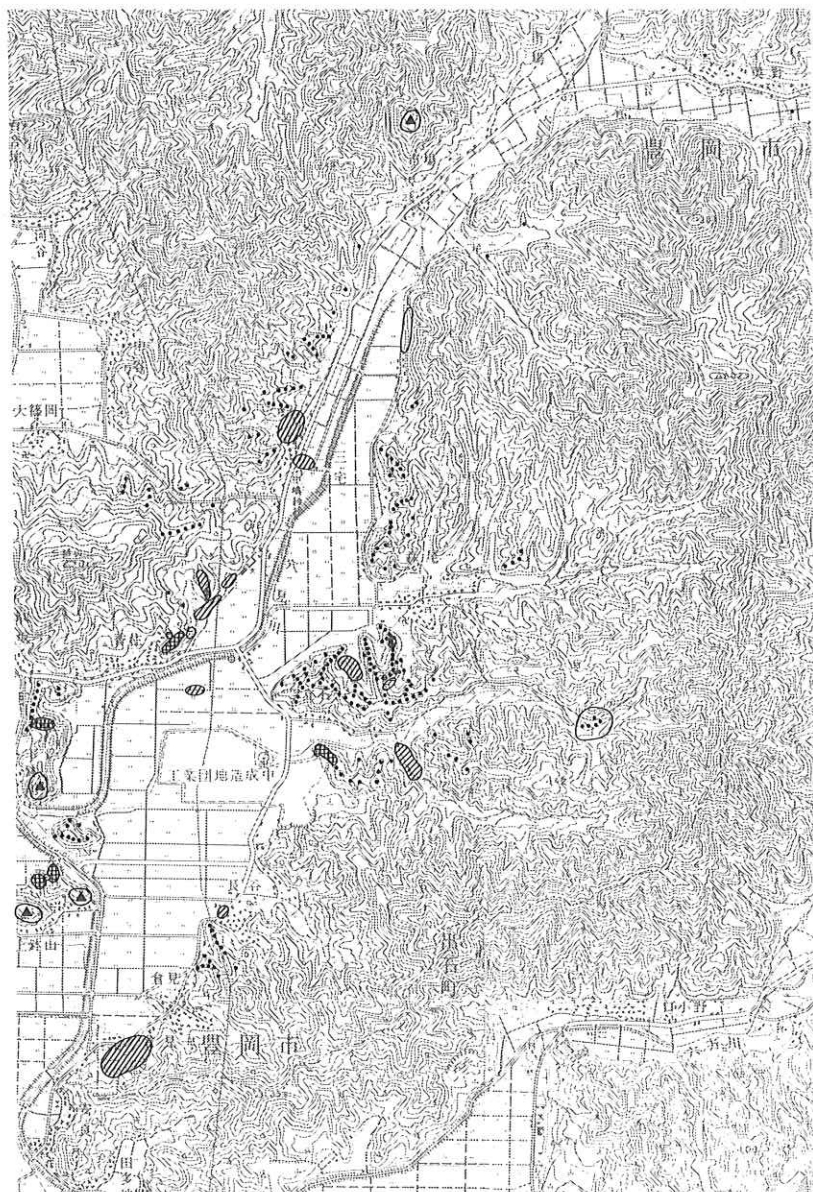


図9 神美地域の遺跡分布

ていない。しかし、市内の円山川右岸域では最もよくまとまった後期群集墳の例であろう。

森尾集落の南、穴見谷を見下ろす北向きの尾根上には、尾根という尾根に狭広を問わず、多くの古墳が造られている。東西 1250 m の狭い範囲のなかに実に170基以上が裾を接するように並んでいる。この尾根稜線上には横穴式石室は存在していない。谷をはさんだ立石地区の丘陵上には、やや散在的ではあるが注目される古墳群が知られている。

横穴式石室は谷部分に若干の存在が知られているが、20~30基といったまとまった群というのではなく、おそらく5、6基といった群が二、三か所あったのであろう。最近、多数確認されてきている横穴墓が、その代役を果たした可能性は強い。

歴史時代の遺跡では、香住井走遺跡で掘立柱建物や井戸跡が見つかっている。また同地区の荒原ではほ場整備工事中に、水路部分の深掘りに際して大量の木製品が採集された。木製品は、斎串・人形などの祭祀遺物であった。森尾古墳付近で大正時代に見つかっている土製馬もそうした祭祀遺物である。

実態が不明なものの、三宅地区所在の薬琳寺遺跡は白鳳時代の軒丸瓦や鴟尾を出土して著名である。部分的に確認調査がされたものの、遺構は検出できていない。中島神社北側でかつて掘立柱が見つかったことがあり、最近付近では場整備事業に伴って確認調査を実施しているが、「神田」とか「田中」と墨書された土器が見つかっている。

1.11 中筋地域 (図10)

この地域は、豊岡市内で早くから知られている古墳密集地帯である。それは、引野大師山古墳群のように、すくなくとも150基以上になると考えられる横穴式石室を主体とする古墳群が知られていたことによるのであろう。

しかし、詳細は56年度の和田長治氏による分布調査によって、はじめてその分布の全容が明かにされるに至ったといえる。また59年度以来、深谷古墳群と大師山古墳群で発掘調査が実施され、その実態が明らかになりつ

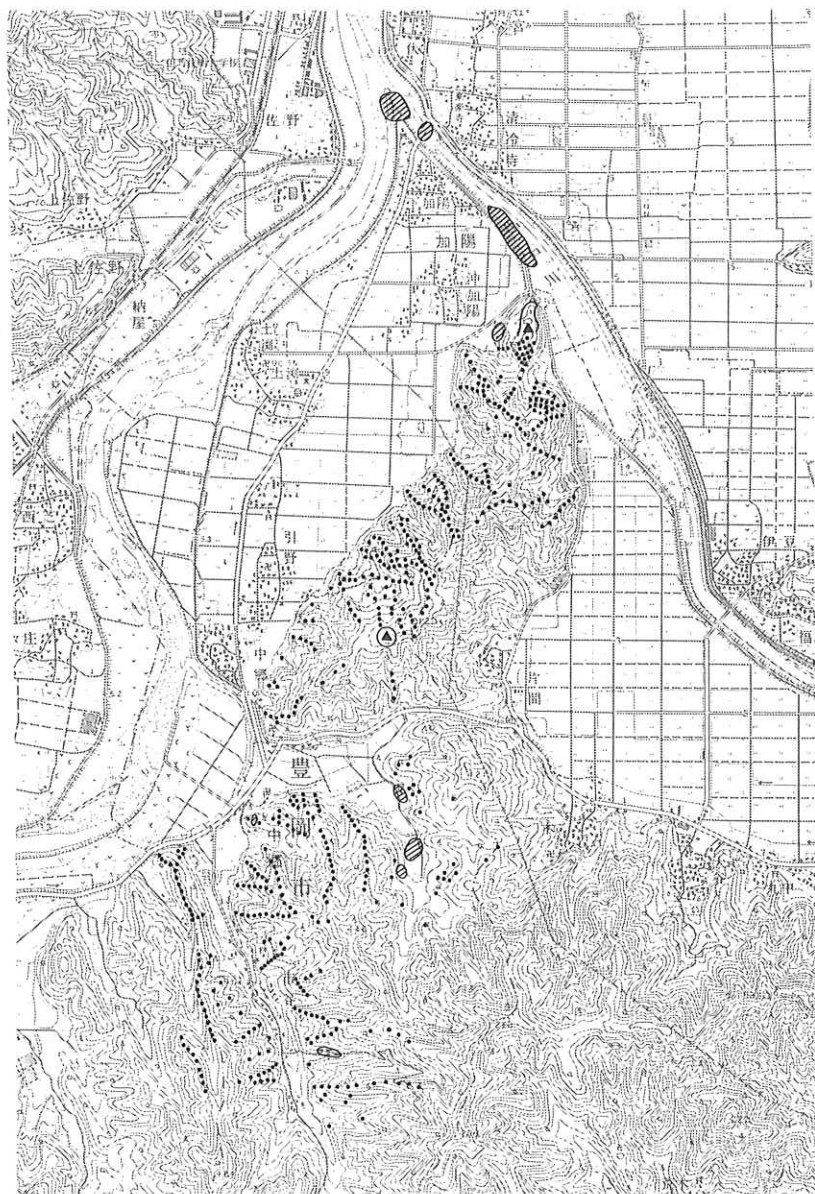


図10 中筋地域の遺跡分布

つある地域である。

古墳以外の遺跡では、かつて引野地区で石斧が出土したことが早くから知られていたが、遺物の所在は不明である。また、中ノ郷地区の葦田神社前の田で石斧が弥生土器とともに採集されている。

また、出石川や円山川の流れのなかからも縄文土器や弥生土器がみつかり、立地などから、古墳以外の遺跡が今後も見つかる可能性が高い地域である。

大師山古墳群については後に詳述するが、大正時代ころの状況がうかがえる新聞記事があるので、紹介しておこう。それは、『但馬新聞』大正3年5月15日の記事である。

塚は山麓の同村氏神引野神社鎮座地を始め同山一帯に現存せるもの南面にのみ七十有余ありて俗に百塚又は千塚と称す可きものなり……中には完全なるものもありて試みに発掘され居るものの石槨を見るに余り大石を用いざれども天井は二枚或いは三枚の大石を用い、間口四尺奥行一丈二尺高さ約四尺位なるが如し内部に於ける埋葬品等は何れの時代か発掘持ち去られたるものらしく一品を存せざれども附近多く土器の残片を見る可し其質悉く祝部にて俗に朝鮮式と称する内部に波紋あるもの多し……又同神社は現に古墳なるが之れ又但馬地方に珍らしき埴輪円筒を用るしものらしく断片数個を発見採取したり。……（後略）

と続いている。

著名な大師山古墳群の大正時代の状況が知られ、また付近の八坂神社からは埴輪円筒が採集されていることが知れる。埴輪は、昭和55年度実施の中筋地区の埋蔵文化財調査で確認されていたことだが、早くから一部の専門家には知られていたことがあらためて判明した。

1.12 盆地中央地域

最後に、図示はしないが上記の各地域に含まれない盆地中央部の状況に簡単にふれておく。市域には、主として盆地縁辺部の丘陵上に多数の古墳が所在するにもかかわらず、集落遺跡などの生活遺跡の存在が希薄である。

今後の調査で確認されることもあろうが、まず、遺跡が地下深く埋まっている可能性を指摘しておきたい。

たとえば、円山川が形成した広大な流域には、いわゆる自然堤防や後背湿地が発達し、人々の様々な生活があったにちがいない。大磯地区の円山川川床で採集された縄文土器や塩津地区出土の弥生時代の石剣は、そうした状況の一端を示す遺物である。現状では、図11のような遺物出土地や散布地を指摘し、今後の発見を期待しておくにとどめたい。

また、今後の文化財保護行政の進展のなかで、江戸時代の豊岡藩庁・武家屋敷・商家・道路・寺などの新しい遺跡も、発掘調査の日程にのぼってくる可能性があることを付言して本章の筆をおきたい。

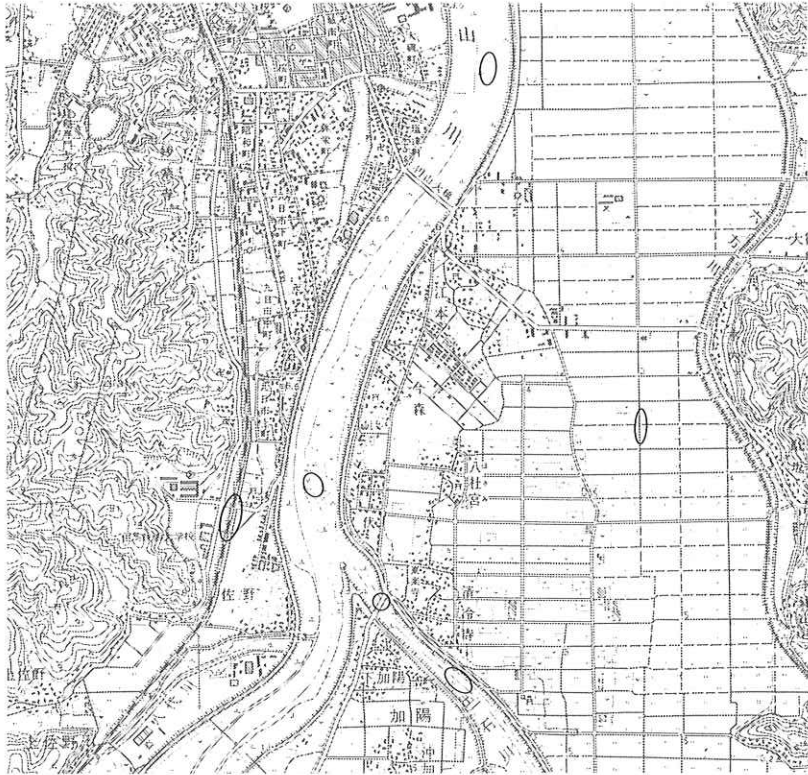


図11 盆地部の遺物出土地

第2章 旧石器・縄文時代の遺跡と遺物

2.1 あらまし

豊岡市には、最近までは縄文時代より以前の旧石器時代の遺跡ならびに遺物の存在は知られていなかった。平成3年になって、はじめて神美地域の古墳調査に伴って旧石器の検出があった。

市内の遺跡で、縄文時代の遺物が出土しているのは奈佐地域が多く、ほかに神美地域・中筋地域・新田地域、さらには盆地中央部を流れる円山川の流れのなかななどで散発的な遺物の発見があった。

特徴的な状況として指摘できるのは、貝塚の存在である。確実なのは新田地域の中谷貝塚と神美地域の長谷貝塚の2か所であるが、ほかにも貝殻の出土や貝殻と土器の出土が伝えられているものがいくつかある。これは、豊岡盆地にかつて海水の入り込んでいたという想定とよく符合する事象であり、県下の他地域に比較しても濃密な貝塚の存在を予測させる事実である。

後にも述べるが、中谷貝塚とその周辺部の調査は、かねてより指摘されていた盆地のこうした状況を一部裏付けた画期的なものであった。これに対して、奈佐谷最奥部に位置する辻縄文遺跡は、その出土遺物から当時のムラの生活、とりわけ宗教的・精神的部分を探るうえで貴重な石棒が出土して注目される。縄文時代後期の代表的な遺跡であり、今後の全面的な調査でムラの構造が解明できるものと期待される。平成2年度に、範囲等の確認調査が実施されている。

円山川川床からまれにはあるが縄文土器が発見されることがある。市域中心部の大磯浜で2点、下加陽地区で数点採集されたのがそれである。その残存状況の良さから考えて、さほど上流から流れてきたものとも考えにくい。盆地中心部の低湿地帯や当時の河川の自然堤防上に立地した遺跡が発見される可能性も強い。それらは、おそらく地下数mのところ静かに調査の日を待っているものと思われる。